



特集 揺れるエネルギー政策

どうつくる? 「原発いらずの社会」

インタビュー 獨協大学教授 森永卓郎さん / 作家 森まゆみさん

どうつづくる？

「原発いらずの社会」

福島第一原発事故から4年が過ぎた。いまま汚染水問題は解決されず、拡散した放射性物質は多くの人びとを悩ませ続けている。原発依存から脱却する道を、元参議院議員の大河原雅之さんが2人の識者に聞いた。

画／所ゆきよし 撮影／基智博雄 構成／本誌編集部

冷温停止でも危険は常に

今年4月、福井県にある高浜原子力発電所の3号機と4号機の再稼働をめくり、福井地裁は「差し止め」を命じる仮処分を決定しました。

司法が原発の安全基準について、不十分であるとの判断を示した意味は実に大きいと思います。ただし、今後、国内の原発をどうするかという肝心な点には、まったく波及してはいないのがとても気がかりです。



原発については再稼働の是非ではなく、どうしたら廃炉への道が開けるかが最大の問題であると、私は以前から主張してきました。いまは冷温停止している原発でも、使用中の核燃料を抱えています。つまり、巨大地震が来て、電源復旧がなかなかできなければ、福島第一原発の惨事と同じことが起こる可能性は十分あるわけです。

だから、私は「再稼働反対」ではなくて、全面廃炉を求めなければ、真の意味での安全は訪れない」と、繰り返し発言してきました。ところが、社会の動きを見ていると「再稼働反対」を叫ぶ声は高まって、どうやって「廃炉」を実現していけばいいかという方向にはなかなか議論が進んでいきません。

それは廃炉に向けてのプランニングが確立できていないからでしょう。どういうスケジュールで廃炉を進め、コストがどれほどかかり、それをだれが負担するのかという具体的な計画がまったく構築されていません。

単純に原発を壊すだけではあれば、1基1000億円もあれば可能ですが、使用済み及び使用中の核燃料の廃棄には天文学的といってもいいくらい膨大な費用が必要であり、それに税金を投入するとすれば、だれが見ても国の財政破綻は免れません。

だからこそ代替エネルギーを確保しながら、こういう方法で原発を廃炉していくという具体的なプランを急ぎつくらなければならぬのです。しかし、福島原発の事故から5年目に入っているにもかかわらず、それがまったくできて

揺れる エネルギー政策

ていません。まさに政治の意図とわかっていいと思います。

地熱がベースロード電源

揚げ句の果てに政府は「ベースロード(基軸)電源」というわけのわからない考え方を持ち出し、「総エネルギーの20〜25%は原発でまかなう必要がある」と言っています。原発事故の直後は、民主党も自民党も「脱原発」と言っていたのに何となく変わり身の早さでしょうか。最終的にはブルトニウムを使って原爆をつくる気じやないかと思えるほど、現在の政治の暴走はひどさを増しています。

「ベースロード電源」という考え方を採用するのであれば、政府が地熱発電を普及させるのが一番の近道だと私は思っています。実は日本は地熱の資源量が世界3位、人によっては2位という人もいますが、世界でもトップクラスなのです。すでにアイスランドは総供給エネルギーの2割を地熱でまかっています。日本は日本の技術で実現されたものです。なのに、それを国内

「廃炉」への道を どう開く

たとえ稼働してなくても、核燃料を抱えた原発は実に危険な存在と獨協大学経済学部教授の森永卓郎さん。急務なのは廃炉に向けての具体的なプランを政府が作成、費用確保の方法を確立することではないかと訴える。



もりなが・たくろう 1957年生まれ。経済アナリスト。東京大学経済学部卒。U.F.総合研究所、三菱UFJリサーチ&コンサルティングなどを経て退職。「年収200万円時代を生き抜く経済学」(光文社)、「年収増減」(角川SSS新書)、「平和に暮らす。戦争をしない経済学」(アスペクト)など著書多数。

でやらないとはどういう了見でしょうか。

地熱もやらない、太陽光もやらない、再生可能エネルギーの割合は12〜13%といっても9%は水力で、ほとんどまだできていないのが実情です。実は再生可能エネルギー事業に参入したい人はいっぱいいますし、お金も出てくるって言われているのに、それを無理矢理押さえ込んで「やっぱり原発しかないよね」という政府には、何か魂胆があるとしたら

か思えません。

核兵器と「原子力経済村」

—— どういうことですか。

日本の原子力産業は米国の頂点とする世界の原子力産業コングロマリット(複合体)といつてもいい、巨大な「原子力経済村」のなかの重要な一翼を担っています。日本企業がしつかり技術面でサポートしないと、原子力経済村が成

り立たない、だから原発はやめられないというのが、政府の本音でしょう。

原子力経済村が核兵器の製造を支えているのです。だから米国や中国は原子力利用をやめられないということにもなります。つまり、原発がなければ核兵器が維持できないのです。だから現自民党政権も原発を存続させ、戦後の日本が70年間続けてきた平和主義をかなぐり捨て、最終的には日本を核武装する国に変質させようともくろんでいるのではないのでしょうか。

そんな自民党政権が守ろうとする原子力利権をぶち壊すには、やはり再生可能エネルギーの普及が鍵になるはずですが、再生可能エネルギーの固定価格買い取り制度ができたことによる最大の収穫は何かを考慮してみてください。

固定価格買い取り制度の導入に際し、政府が「即時償却」を認めるだけで、とてつもない金が出てくる、膨大な数の出資者が現れることがわかったのです。即時償却とは、投資した金額をその期の経費で落とせるという、ただそれだけの話なのですが、現在はや

めてしまっています。

とりあえず今年の課税だけを回避できればいくらでも金を出す人が実は無数にいるんですよ。だから「地熱発電所に投資すれば即時償却を認めます」と政府が言い、国主体の大型プロジェクトを地方でバンバンやればいいと思うのです。

そうすれば、あつという間に原発のかわりの電源が確保できます。何で現政権はやるうとしないのでしょうか。長い目で見たら国は全然損しません。全く財政負担がいらないので。

廃炉費用の捻出法は

投資を呼びかけるなどの方法で生まれた資金を原発の廃炉費用に充当することもできますよね。

そこは政府が決断するかどうかという話です。日本は純資産が2700兆円くらいあるとされ、かなりの部分を金持ちが支配しています。彼らだけで1000兆円規模の資産を保有していますから、その1割を引きずり出すだけで

100兆円くらいは出てくるでしょう。残念ながら庶民をいくらたいたって無理ですから、彼らのような金持ち、超富裕層のお金を使うのがいいと思います。

ところが、環太平洋連携協定(TPP)から何から何まで、米国という、力にものを言わせて世界を屈服させる、漫画「ドラえもん」のジャイアンみたいな国の意思が大きく働きますから、これに歯向かえるかどうかという問題がどうしても付いて回ります。

日本政府が原発政策を転換、廃炉を進めるための投資を国内外に呼びかけ、優遇税制を採用すると宣言するのをはたして米国が黙って認めるかに尽きるといわざるを得ません。

米軍の普天間基地移転をめぐる沖縄のとてつもない苦悩を見てもわかりますよね。当時の鳩山由紀夫首相が「少なくとも県外に普天間基地を移設する」としたのは2009年のマニフェストでした。「日米で対等な立場に立つ」という姿勢を日本の首相が打ち出したのは、ごいと感心していたら、

すぐに腰砕けになってしまいました。別に私は米国とけんかしようとは思ってはいませんが、もう奴隷はやめる、対等な立場に立って、主張しあう関係にならなければいけないと思うのです。

福島原発の事故があっても原発は低コストでクリーンなエネルギー供給源というプロパガンダ(宣伝)が繰り返されています。

使用済み核燃料の最終処分までのコストを考えたら、恐らく原発が電源として安いはずがありません。さらに、いま私たちが真剣に考えなければいけないのは、冷温停止している原発が国内に50基以上あるという現実です。つまり巨大なリスクを抱えているだけの、何の役にも立たない原

発という建物が50以上もあるという事態にどう対処するかということなんです。

原発を1基動かせば年間1000億円の利益が出るとされています。追加コストは燃料費のウランの購入費だけです。私が原発の専門家と話していると、各原発の抱えるリスクの大きさは違うと言います。「やっぱりこれは再稼働など絶対できない」という原発もあれば「むろんリスクはあるが、それほど大きくない」という原発もあり、はっきり分かれるわけですね。

こうした点を政府が堂々と情報開示し、「このラインよりもリスクが低いものは、とりあえず廃炉費用を捻出するために動かしたい」と国民に提案するという方法もあるのです。

とにかくゴールは何が何でも「原発ゼロ」。全原発の廃炉です。いま問われているのはどうやってゼロにもっていくかという具体的な方法であり、この点についていろいろな意見を出し合い、だれもが最も納得できる解決策を見いだしていくのが何より大切ではないでしょうか。



揺れる エネルギー政策

地域の暮らしと

エネルギー

資源節約型の暮らしは、地域にあるという作家の森まゆみさん。脱原発を宣言したドイツでの見聞も含め、これからの暮らし方を聞いた。

撮影／水野佳世



もり・まゆみ 1954年東京都生まれ。出版社で企画、編集の仕事にたずさわった後、フリーに。84年から25年にわたり地域雑誌「谷中・根津・千駄木」を発行してきた。著書に「その日暮らし」（集英社文庫）、「読書あり！ 新聞立派探検」（岩波ブックレット）など多数。

繰り返された事故

——1986年にチェルノブイリの原発事故が起こり、原発は危ないとかわかっていったのに、再び、福島第一原発で事故が起こってしまいました。

私も原発の怖さに気が付いたのはチェルノブイリの事故の時でした。当時、子どもが0歳と2歳。地域で学習会をしたり、ブルトニウム輸送反対のデモに参加したり、イデオロギーではなく生活者としていやだという思いから必死に

行動したのに、その後、日本の原発は24基から51基になってしまいました。

私自身は、その前から不燃池の地下に巨大な駐車場をつくる計画に反対していましたが、それが架橋となり地域に降る雨は大地からもらう水、と考えるようになって、水や資源を大切に使うことに興味を持つようになりました。地域にある池をつぶして遠くのダムから水を引いてくるのはおかしい話です。同時に古いものを簡単に壊していいのかと、地域雑誌「谷中・根津・千駄木」を発行して東京の古

い町を見直す活動を始めていたんです。

水をためたり洋服を作り直したり、みんながベビーベッドを使い回したり。そうした暮らし方を実践してきただけに（原発の増加には）「しまった」との思いが強かったです。

私たちが懸命に反対の意志は表明してきたけれど、どれだけ具体的に自分たちの暮らしや社会を変えられたか、自問自答するところですよ。

福島の原発事故のあと、原発関連の映画祭を行おうと、上映作品を選ぶため50本くらい関連映画をみたりです。ど

れも暗い気持ちになってしまいう内容でしたが、唯一、希望が持てたのが「シェーナウの想い」ドイツのシェーナウ市の市民が、チェルノブイリの事故後、子どもたちの未来のために、みんなで出資して自然エネルギーによる電力供給会社をつくり、運営する話なんです。それをみて、ドイツの今を知りたくなり、取材してきました。

個人ではなく地域で

——ドイツは日本の原発事故

後に脱原発へとかじを切りました。どのような暮らしや社会だったのでしょうか。

ドイツもいろいろと悩んでいる、そううまくいっているわけではありません。ドイツは、冷房本位の日本とちがって冬の暖房に多くのエネルギーを使います。その点でいいと思っただのは、共同住宅はもちろん、戸建てでも地域集中暖房システムがあり、燃料となる石油をペレットに変えればそれで一気に節約できます。

石油や石炭を使ってつくった電力をまた熱に戻すヒーター的な使い方は一番もったいない話で、エネルギー全体をみていかに効率よく使うかを問う必要があります。

いくら風力や太陽光といった自然エネルギーでも、域外の巨大資本の運営ではそこがもうかるだけだし、石油を使えば中東、天然ガスを使えばロシア、それぞれ他国にお金が流れるしくみです。地域で経済を回して外にお金を出さないことが豊かな地域をつくるという考え方をドイツで学んできました。最近日本でも「里山資本主義」などといわれることですが、ドイツは

それをやっています。

個人だけでなく地域で考えるという発想ですね。原発事故後は、各部屋でエアコンを使わず一緒に過ごして暑さをしのごうというクールシェアの動きも始まっています。高層住宅の密集する都心では、窓を開けると排気ガスやエアコン室外機の熱風が入りますが、私の地域では、夏はみんな窓を開けています。木と緑があるだけでだいぶ過ごしやすさが違います。

この間、東京五輪のための新国立競技場建設計画に反対してきたのもそのためです。東京でも神宮の森から新宿御苑までは、木と緑がつながるグリーンベルトになっていて、夜には冷気がにじみ出し、クールアイランド現象が起こるんです。現計画は、木を切つてそこに巨大な温室をつくるようなもの。自然に負荷をかけるような建築を考えていかなければいけないのです。地域の環境を考えたとき、日常的にできることはいろいろあります。捨てるよりは修理して使おうと思っても、どこへ持っていけばいいかわからず捨ててしまう人は多いん

です。それで、町のどこで包丁を研いでくれるか、傘の骨を直してくれるかを紹介する活動をしてきました。

あるいは商店街のイベントの景品に、多くの人が不安を持つ食材はやめようとか、東京大学の研究所に放射線管理の厳格化を申し入れるとか……。30年間地域でそんなことをしていると、考える人も多くなるし、何か起きたときに、みんなが集まっていきたいことを言い合える場ができます。

コミュニティで暮らす

—— 日常の活動がコミュニティをつくってきたんですね。社会学者はよく「コミュニティの崩壊した今」という言葉で語り始めますが、崩壊したところからでは先に行けません。私たちは、新しいコミュニティをどうつくるかを意識して実践してきました。お金のない人でも都心に暮らして子どもを育てながら楽しい生活を仲間とできるといふモデルはつくってこれたのではないかと思います。

最近、私の地域にもシェアハウスがたくさんできて、若いおかあさんが子どもを育てながら一軒家を借りてそこに賄い付きで留学生を住ませたりする例もあります。都心で風呂付きマンションに住もうと思ったら家賃は高額になります。一軒家を借りて4人でシェアすれば少ない給料でもなんとかなります。私もそうやって少ないお金で、子どもを保育園に預け、知り合いの総菜屋でおかずを買い、町を使い倒して生きてきました。そういう暮らしには意外にエネルギーはかかりません。

—— コミュニティづくりには何が必要でしょうか。

私たちがしてきたのは、地域の歴史や自然を掘り下げ、その情報を雑誌に載せて売って歩くことでした。

たとえば、どこにどんな木があるとか、井戸水や植生の調査、大気汚染調査など。また、これは防災にも関係してきますが、食べられるものを探して歩く活動もおもしろいです。むかごご飯や八重桜の塩漬、タンポポも食べられます。谷中墓地のものをずいぶん食べましたね。虫よけ

特集 揺れる エネルギー政策

「原発NO!」は地域の方で

文/大河原祥子

経済アナリスト

の森永卓郎
さんとノン

フィクション作家で社会運動家の森永卓郎さんのお話には、脱原発社会を実現するヒントがちりばめられていた。

「企画展のロードマップを示し、廃炉事業に大きな投資を呼び込め！資金は集まる！」と心強い森永さんの発言。森さんからは「コミュニティは意識しないとつれない」「平時からの活動で考えの人をたくさん生み出す」「次の世代を育てられる地域づくり」の大切さを指摘された。あたりまえのことのようだが耳の痛い話でもある。基本は自分と地域の関わりなのだ。

一発事故が起これば人や地域に壊滅的な被害を及ぼす原発、「3.11」を共通体験として日本のエネルギー政策は転換するはずと信じて活動してきた。

しかし、原子力をめぐる「政治家・官僚・業界・学会・報道機関の癒着の5角形」はあまりに強固だ。安倍政権は短期的な企業利益を優先し、原発輸出で経済成長を狙う逆行ぶり。エネルギー基本計画では原子力を「重要なベース電源」とし、長期的エネルギー供給見通しに福島の教訓は生かされず、欧州の意欲的な目標と比べてはなはだしく見劣りする。

エネルギーミックスは、徹底した省エネと再生可能エネルギーの最大限の導入、温室効果ガスの削減目標との整合性をはかって算定されるべきだ。事故直後の電力不足の予想を覆し、東京の電力消費は1割も減少した。過剰消費を改める節電と省エネ



森永卓郎氏

の効果は絶大だ。

エネルギー安全保障

の観点

からも6%という情けないエネルギー自給率を上げるのが王道のはず。エネルギーの海外依存による露の流出を減らし、国産の再生可能エネルギーの拡大こそ重要な施策であり、地域再生の鍵となる。エネルギーを地域でつくり、使い、外部にも販売する。地域に仕事が生まれ、地域にお金が循環する。そう、ドイツ南部の町「シェーナウ」のように！

来年4月からは一般家庭でも電力会社を選べるようになり、2018年から20年には「発送電分離」も実現する。初のエネルギー選択に向けて地域を回り活動し、自治体の環境・エネルギー計画や集約づくりを盛り上げていきたい。ご当地電力も増えている。「脱原発の一つの意思を多様な立場から多様な活動で連携する」という法政大学教授の松嶋博俊さん(故人)の言葉を胸に、エネルギー選択を「生産する消費者」として進めたい。

おかわら。まさこ 1953年神奈川県生まれ、1981年生活クラブ加入。生活者ネットワーク所属の都議会議員を3期、2007~13年議院議員。消費者問題に関する特別委員会委員や農林水産委員会理事なども歴任。「TPPを慎重に考える会」事務局長を務める。

の農業には少し気をつけなければいけません。自分の住んでいる土地のことを知る活動をする、みんな興味をもち始めます。その結果、自分の庭や借地で畑を始める、ベランダ園芸や路地園芸を始める人も多くなります。

次世代に伝える暮らし方

土や緑、井戸水、みんな命を支えるものでね。水や

食べものを買ってはいけません。子どもたちは小さなころから谷中墓地でお月見とか虫開きの会とかカラスの観察会、ドングリを使ったヤジロペエづくりなどをして楽しんでいきます。井戸水も、その水がどういうものなのか、大腸菌群、有機溶剤の有無など全部はかれますから、その結果を話し合ったりもします。地域にある自然、木や水を

共有するところからコミュニティをつくっていくとつながりがみえてきます。男性の参加も重要ですよ。ゴールデンウイークなどにイベントを行うと、いつもは参加できないサラリーマンも参加しやすいです。それが地域になじむきっかけになったりもします。

今、自然エネルギー社会を次世代に渡したいという思いがこれほど強くなっている時はありません。見えない場

所で大量につくり大量に消費するのでなく、使う分だけ見える範囲でつくることが大事と伝えていきたいです。そういう暮らし、実は楽しいんですよ。夏の衣服は木綿ではなく麻が涼しい、水まき、すだれも風情があります。私の好きな夏目漱石の句に「重荷な小さき人に生れた」というのがあります。

古来、日本人は、つましく小さく暮らすことを大切に